

詩南車

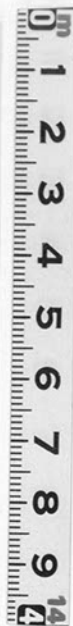
昭和五年五月二十五日發行

【隔月發行】

第五年

第貳拾參輯

詩南社
磐城



島田忠夫著 童謠詩 柴木集

(木版刷表紙
挿書四枚)

- ◇小杉未醒氏裝幀
- ◇四六判一二四頁
- ◇定價壹圓七拾錢
- ◇送料書留拾八錢

本書の著者が現代童謠界に占める特異なる地位については今更言ふを要せぬであらう。其の作品はもと童謠に發足して、漸く童謠の域を超脱し、醇乎たる詩の世界へ高揚し發展した。多く簡朴なる農村の生活と淡雅なる自然の風趣とを融かし合せて、滋澤なること類ひなき「味」の境地を醸成する、其の描寫の簡にして妙を得たるは水墨の韻致に通ひ、疎散なる律形の裡にも豊かなる詩的情操を湛へてゐる。近代泰西の風潮に浸潤された日本詩壇にあつて、此の書の作品の如きは眞に清新なる一生涯を拓くもので無ければならぬ。しかも其の詩篇を通じて流露する心情の基調は渾然として珠の如き童心そのものである。著者が本集に「童謠詩」の名を冠するも其故に外ならぬ。加之、未醒・恒友・鶴三・鐵人の四書伯が滋味ふかき高品こそは此の詩の特質に最もふさはしきもの、本書に一段の光彩を添へることは疑はない。こゝに普告して江湖の清鑒を待つ。

東京神田保町 岩波書店

振替東京二六四〇番
電話九段(33)一〇八番
一〇九番

詩南車 第二拾三輯

歌		目次		感想		歌	
所適抄 木兎莊即事 近作の内から 暖き海	森田夢の秋 島田忠夫 松村清 高久霞	波立一 扇谷義男 旦野草笛 瀬古貞治 浅海與三男 中山世志子 疋嶋國高 住江田正實 白江甫太郎 寺原迷二朗	五月一日 題を失つた歌 黒猫 狂人街 新らしい出發の唄 街をそれて歩く 自殺 大の字 軋れたころ 生活	愛する者の獨斷と横暴 たれし知らない ● 秋の朝 二月街 『時』の墓標 ● 青い風景	栗原孝太郎 片寄歌二 柏水哲 橋本草洛 橋詰一郎 他十三名 双葉清 駒木根忠慶	黄昏るころ 寺庭 寒に入る 冬 氷雨 早梅 ● 早春 なりはひ 娘へ いのち ふたりの我 ● 悲曲 ● 戯曲 ● 短歌會詠草 同人雜誌紹介 編輯後記 題字	武田あけみ 加藤輝雄 町山正利 細野三郎 石川梅子 佐々木顯 明石眞男 島末之 佐藤淡雪 佐藤ま子 宮田義家 丹野八千代 巖谷小波

所 適 抄

森 田 麥 の 秋

わけもなく我を張りすぎて負けにける命ふたつよいつくしみあふ
幼きがよき父親によき夫にあらむ希ひはいつはりなきを
吾が妻のおもわ老けたる今にしてこどもを更に欲しとおもふも
芝原のなかをひとすちてかてかとき吾が行かむ道どろけせり
照りうすきわかな水ながら吐きかけし葉つら凍れり葉廣石落る
誰やらがうがひの水を吐きかけし葉つら凍れり葉廣石落る
うらら日に目障りなれやきたなくも樟の秋芽は寒にいたみし

木 兎 莊 即 事

島 田 忠 夫

風さむき夜のちまたをとほり來つる吾にうれしゑ室ぬくもれる
あたらしき木の香匂へり置物の剝製の木兎まなこあきる
この家の主くすしのやや老いて白ひげまじる何ぞしたしき
常いそがしくあり經る君がいささかの心しづめに居る室ならし
きみが齡の老いにい向ふ時にしてしづけさ保たむことの尊さ
硝子戸の外はさむからむ月ながら白くふけたる庭のさぶしき
月の夜のここにも及ぶ煤煙くろし心がなしく吾は見にけり

近 作 の 内 か ら

松 村 清

道の面にはこりをあげてふる雨はばらばら雨ぞ通り過ぎたり
降り出でし雨にむせあがる道ほこりひとりしゆけば寂しき匂ひ
晝をねて眠りつかれぬ眼のつかれ母にもうして白湯もらひたり
ひる乍らつつがある身を臥せらるつつけうとき蠅の足搔きをきくも
降りいでし雨はカンナに音たちて夕くらまりぬ冷えせまりつゝ

暖 き 海 高 久 晩 霞

松の歌海のしらべを聞きにつつ濱の砂地にいそく時語りし
次ぎ次ぎに寄せ來る波を故知らず待たれてしばし岸に立てるも
陸にまさる野山生き物ここの秘めて只渺々と海こそ奇しけれ
街燈も小暗きまでに罩めて來ぬ霧深々と物の化の如く
霧を深みわがともす灯もちからなく會ふ人かげを避けにつつ行く
一すじの路行くさへに危うしと濃霧を分けて汽笛鳴くしきり
水車めぐるさまを軋る音を珍らしみつゝ吾もただすみし
鶏二つ降りの家ゆ追はれ來てたちまちおのが畑あさりをり
膝先のやゝに寒さを覺え來ぬ夜をつゝましく友と語るに
——途上——
——夜——

五月一日

波立一

えい、顔だな、畜生
間拔けた汽笛なんか氣にするあれい。
ぢやあー行くぞ、阿母
サーベルの四五本もへし折つてくるんだよ。
一八八六より一九三〇年まで
血でぬられた五月一日の顔を見ろ
行け！ 五月祭の真唯中！
空は青く、地上は赤き群衆の奔流だ。

題を失った歌

尾崎な子におくる詩

扇谷義男

鍾のやうに沈んだ闇のなかを私は一人運ばれてゆく
悪かれた四人がよろめいてゆくやうに
私は毀れた頭をかへておまへから離れてゆく
うしろにかすかな燈火がにちんでゐる
あの燈火の下にいつまでもちつと立つてゐるだらう
私の無事を祈つてくれてるだらう
私のために遠い公園まで行つてくれたおまへがー
私のために香高いコーヒをいれてくれたおまへが
だが、今は私のまじりには誰もゐない
いくら呼んでもやさしく微笑まなざしはもうどこ

清めろ！
十字街を暴走する俺らの行手。
恐ろしいのか！ 兄弟
官服をXんづけ、突破しろー
轟けー幾萬の歌聲ー
響けー強力な聲ー
え涙ぐんでる奴は誰かー
兄弟ー 小憎しい程嬉しい日だこ。

感覺の風景

栗原孝太郎

4

1 ステイション

陳橋、ブラットホーム、軌道
窓、黒煙ー青白い顔をした
少女、幻想のなかに描き出さ
れる初戀のひとの面影、僕は
旅をするたびにこの列車のな
かに、初戀のひとと眼ざしを感
じるー窓に倚つて、移つて
行く風景に餘念のない幼い子
供を運れた若い人妻をみた時
に……

(僕はロマンチズムは價値の
ない奢侈品です)

ふと、伊豆の旅に思ひ立つ
てたそれがれの街をひとり、ス
テイションの灯を懐しく
(僕は、正岡答に笑はれるや
うな氣がしきります、なぜだ
つて君……)

僕はステイションの白壁に
倚りかゝり乍らやたらに旅行
案内の頁を繰くつたのでした

黒猫

旦野草笛

春を埋め
陽を潤め
暗い墓場に老ひられた
戀の白骨をあさり あさり
闇を呑み
星を抱き

狂人街

瀬古貞治

冬が錯裂した
氣象臺の警報は空中に樓閣をへんぼんと築いた
低氣壓の爆進だ
總動員のメガホンはうなづてカムフラージュされ
た襲来への要撃だ
太陽の沈没を待つて照明弾は夜光蟲となつて飛翔
した
號砲の響きだ咆吼は叫喚を乱打してスノーアイス

新らしい出發の唄

浅海與三男

2 素描

靜かに階段をおりて浴場へ
僕はそこに、白い湯氣の立こ
めたなかに柔かな姿態の女性
の裸像をみた。

(僕はこの場合誰しもが書
く曲線美を忘却する程に低廻
趣味ではないと僕自身の官能
のなかに認識しました)

(靜かだなあー)

裸像が微笑したやうでした
かすかに、頬のあたりに、ち
らとすきた愛慾的な暗影を感
じたのです。

(僕の神経を末梢的なもの
と思はないでください)

……室へ歸つてから、僕は友
人に手紙を書いた。

山の湯は靜かです。が、僕の
感覺は益々鈍感にそして變態
的になつたのでしたと。

3 湯島にて

(ラフ・イン・アィドルネス)
溪流に沿つた僕の窓の窓か

5

君はいつの頃からか要領のいい男になりきつた。
君は何處へ行つてもちやほやされる人気者
ゆがんだ感情を隠匿して
君は狡猾な愛嬌をふりまいてゐる
それでいいのだ　それでいいのだ
それが生活への徑捷で、君が悪いのではない

街をそれて歩く

よる街をそれて歩く――
そぐはない感情をほほつて
明るい灯と人波からそれ
暗い小道から小道へと行くのだ
潮聲はあまねく耳につきまゝとふ
無言の足はやみなかきわけ
時は無意味に消失されて
一つの街燈さへ滑りぬけて行くのだ

自殺

皆が私の土地をうばつてしまつたので

けれど皆が後からついて来て
笑つたので私は神様のいかりにふれた

大の字

暗緑色に塗りつぶした草の上に
らつきよりのやうな涙をばと／＼流して
学校歸りの兄等に見られてゐた
大の字にひつくり返つて
目の痛くなるまで空の彼方を見てゐると
青白い陰影がもり／＼追つてくる
こんなに宇宙は廣いのだが
職を求めて疲れを休める所は
寂しいものは大衆の中の孤獨客居である

軋しられたころ

ページメントの暗がりの中に
赤電車が吸ひ込まれてゆく頃
己は毎夜
トカゲのやうに街々を這ひ廻る
それでも汗ばむだ
眼じりと思想とは……

社會の眼光は狡猾な冷視――
不満と怠情をかなぐり捨て、
行け新しい君の出發だ
君のあたゝかい情愛を忘失するな
見よ。
その先、ほのかに咲き開らく花の微笑む季節がある

中山世志子

男、歩く事を禁じてゐる数多の
冷たく底光りする猜疑の瞳に
おびやかされた脳はち／＼み
自らの行動をば／＼がらも
男の友達と身なかくして歩くのだ
凡ていられる氣まゝな廣い世か
細々と胸にたき乍ら――

正島國高

夜をながけて私は青白い海の底に沈んだ

そして裸のまゝ砂の上に眠つてゐた

住江田正美

浮んで来る未來の住ひは
灰色に描れたあの刑務所だ
『刑務所の裏に花がさいた』よ
こんな所だつて實も結ぶ子孫のために
さいてゐるさいてゐる、人間は至る所に青山が
あるのだと
青蛙や蟲の群を驚し乍ら
大の字は起き上つて森の中に

白江甫太郎

あゝ俺は今――
生活の糧に總體軋しられて了まつた
夜露にかじかむ月日は
ビルデングの間に
いよ／＼するどく失り
ページメントの暗がりの上に

ら、ゴールデン・バットの青
い煙が流れて冷たい朝の空氣
の中へ靜かに溶け込んで行つ
た。

(お目覚めですが、早いで
すね)

隣室のA氏が廊下から首を出
してゐた。

(散歩にでも出かけません
か――朝はいすよ)

しかし僕は―ステッキを持
つて裏山の路を辿り乍らA氏
が昨日の夕暮れ(戀なんて退
屈ならんでせうねえ)と云つ
た言葉を思ひ出してゐた。

(感傷こそ、僕等の生活に
とつて恐ろしいものだ)

銀座のページメントそして
必然的に赤い近代の赤のす
がた。

(僕は自己嫌惡を感じ出し
ました)

(懺悔心持だ)
炬達へ入つて本でも讀もう

僕はその日、A氏の散歩をと
う／＼断つたのでした。

4 銀貨

電車へ乗つてから、僕は寒
くなつたのでした(何故)素
的な女性を見たのです――
家へ歸つてからも五十錢の銀
貨が片手に仄暖かく汗ばんで
にざられてゐたのに氣がつか
なかつたのです。

(夢のやうな話――えゝま
つた、さうなんです)

兄へ贈る心理

Hへ消息に代へて

片寄歌二

食ふ爲めに働く、働く爲め
に食ふ、この二つの問題を拓
く前に人間は卵とその産んだ
親とに對して考慮しなければ
ならないと思ふ。

だがそれは虚が産んだ社會
の實際的悲哀ではなからうか――
實際現在の社會に於て働
かずに喰つてゐる人間がどれ
程あるだらう。

ド 危劣的な存在だ

言はば電線にひつかつた風のやうに
古い生活を忘れてゐる
己である

飛翔力！ たつた一步の隔りなのだが
あゝ俺は今宵も……………
ひろがり切つた夜霧を孕らむで
深いよどみに落ちた

生活

私がすわつて居る時恐怖は真紅の日傘をさして忍
びよる

私が振向ふとする時一面の赤い半鐘は膝をすれず
れに鳴り出す

私の我儘で意氣地ない心はさうしても振むくこと
が出来ない

赤い顔物でうんだ母指が短く

子 指

何さいふ否ざはりだらう
虫歯の中にブラチナが光り
盲目の外科醫者は手探り
ねつとりとした肌ざばり

——(八頁下の段より續く)——

追ひ込まれた櫛の中で柔しくアタ(う)
の子は枯草を食べる。水氣の失つた干草だ
もしもこれが人間であつたならば、人間
の生活はすべてに虚を撒き散らしてゐやし
ないか！ もとも動物達が追ひ巻かれた櫛
の中で何人の反駁も恐怖も抱かなかつたと
したら、彼等は彼自身の満足で不満足を
殺害した事になる。もしも一人の女性に戀
されたとして受け入れる事が出来ないとし
たら……………

火花の散らない戀愛。何故この時に人間
達の慾望は黙然しないのだ。

彼は暗の中に於て一異性に色慾を感じ
ながら何故途上の淫賣婦を恐れるのか！
偽りの社會を助くべき貨實の力は一體何
處に潜んでゐる。

×
神經衰弱だと自言する人間程鮮明な意識
を所有する者はない。

自殺するのだ！と云ふ者の言葉こそ生へ
の執着を忘れる事の出来ない象徴である。

街々の行進曲を聴く

恰も地獄のコーラスを聴くやうな心で
その發聲せる時代臭をかきながら
赤い大きな舌をむき出して
げり／＼つと笑つた

俺は近いうちに
自殺するかも知れない

寺 原 迷 二 朗

觸れては情にこぼれ易い子指が短くて
感覺の弱い長い指先にまつはる

倦怠な午後のお鈍光よ！
私の身丈だけが

日蔭の漆の墓の様にひよ／＼と伸上り
一本立の出来かい高い窓から
閑夜天井を眺めまわす。

同

重苦しい香料のしたたり
しつくりとうまうさうなあこ——
戴冠者はかみついた
おい、子指。

人

少くとも死の瞬間には餘念を廻す餘裕等
は勿論與へられるべきでない。

その瞬間に於て既に彼の精神は消滅しか
けくゑなければならぬ。

剃刀を咽喉に當て、死のローレライを想
ふ。

それは彼自身としては如何に華やかなる
幻影として思慕するか知れない。

だが人間はそれを捨ての間は決して死ぬ
事は出来得ない。

死の瞬間に美的感念など潜在する以上人
間は更にその空虛に慾を生ましめずには置
かない。

×
僕はまだその奇的なる瞬間に遭遇しては
ゐない。

また、その不可思議な意識に到着し得た
としても醒めた死後間の想念は既にその限
界を遙かに遠退いてゐる。

その生命の切端、死の先端とに於て發し
た光こそ刹那に生じ瞬間に消えて行く悠遠
なる藝術の姿である。

少くとも死を吟する者の心理は剃刀が彼

の咽喉を切斷するでなくして彼自身が剃刀
に殺害されねばならないと思ふ。

×
彼の男の書翰令の思念が僕には全然方り
得ない。と同時に彼の男も又僕の抱いてゐ
る構想に對しても想像する事は許されてな
い。

自然の偉大なる思惑の中に神は微細なる
人間それに對しても繊細なる計らひを與へ
る事を忘れてはゐなかつた。

「生れた時も孤獨にて、死も只一人にて」
この考想はそこに生れてくるのではない
かしら——。

即ち要とする處は虚偽の上
手な使ひ分けである。
野放しにされた鴉の様に
お前達はトロを動かす
エジプト・ガラスの様に空
は涙にぬれて、
大理石の宇宙にお前達の姿
をのみ付ける。
原つ端の隅の方で毎日お前
達か
苦しんで産んだ卵を
誰れがだまつて奪つて行く
誰れが奪はれるのだ！
誰れが産ませたのだ！
エジプト・ガラスは涙にぬ
れて、
わびしく空に反映する。
もしも人間が最も愛する働
きを失つたら人間はその時程
淋しい事はない。
もしも人間が自殺したなら
ば、この時程幽霊が美化する
時はない。
死者の前に誰れが指をさ
そう！もしも指をさすものが
あるとするならば、それは彼
自身のいつわりの己の處に對
して羅刹の指を向けてゐる事
になる。

霧雨集

鐘

柏木

哲

平には我友多し酔れてまろび合ふまで親しきもあり
八とせの朝な夕なを親める城山の鐘今か響かむ
閑文字讀み感したる新聞が十日餘りも溜りけるかな

温泉情緒

橋本

草洛

崖の上の温湯の道の湿やかに谷よ吹上る霧のしぶくも
つかれたる身體横たう湯の宿に朝げの霧の雨とらいつ
三昧の音も寂びて夜ふけぬほろ酔の床に悲しいで
湯の流れ

春寒し

橋詰

一郎

暖かき日は背に照れりしかすがに鏡き銀杏の梢
土手の上に寒しくならふ梅の木のはつはつ咲ける花
をともしむ

四家

春水

夜おそく歸りし父のおみやげを妹たちは起ち待ち居り

初雪の降りきて喜ぶ子供等に纏りにつつ犬とび歩く

草野

傳

如月の真夜の静寂を破りつ支那蕎麥の笛が寒々響く
吹雪浴びて納豆賣る子が呼び聲の黄昏の町に遠ざかり行く
惱み多き我を導き神の手に縋れど飲め乙女うれしも

岡田

實

夕寒き窓にもたれて仰ぎ見る二ツ箭の峰の雪美しき
冬ざれの雪に壓されて煙突の煙りは低く空に漂ふ
本棚の上に照り葉の藪柑子春立つ朝の風に揺れ居り
冬の夜の野道を走る吾が鼻に寒さ襲ひ來て痛さ覺ゆる
師の君ゆ贈り賜はりし筆蹟を掛けて整ふ春の床かも

水町

冷子

高き波白くくだけて潮吹ける海の朝あけ勇しき限り
幾十の海鳥の群ちと鳴き友呼びかはし波に戯むる
いく時をなごさに立ちて寄せかへす波頭あかすなが
めぬ我れは

町田

みつる

聞きなれぬ言葉聞きつつ遠く居て此の頃と故郷戀る

病院のゆききに仰ぐ六甲の山は風今日もあかるき
故郷をひとり離りてはことさらにふる里の言葉なつ
かしきかな

堀川

八重子

ひるすぎのうす日の前につつましく手をくみ合せて
深くいきする

真夜中を何ともなしに思ひ侘び思ひまよふ髪をとかしぬ
病む床に鏡とり出し右はほの泣きはくろなどしばし
見てあり

永山

耕山

金あらば妻や子供の衣買はむに悲し其日のパンに追はるる
故わかぬ淋しみ抱き今日も又夕暮の道を歸りぬ

木野

もと子

すがれ木の木の間を通し春の日のなまあたにかき畫
下りかな

やはらかき春日をりて今日も亦山茶花の花一つひらけり

鈴木

一葉

日暮るれば思ひ出さるゝあの時の涙にぬれし彼の瞳を
別れても心は永遠に離れじと誓ひし彼の言葉強かきし

丹野

晴夫

餅焼きて我にすゝむる母上の頭に白髪が増るは淋し
つらくとも汝が身のためと書きませる母の手紙に涙
こぼるゝ

おそろしき木枯止みて夕空に三日月淡く光りける
故郷になつかしき友を訪ね腕たくましく我に握手しぬ
人氣なき山里深く我一人山雀の聲聞くはさびしき

田代

勇朗

御佛に仕る我身うら悲し愛と憎しみにたわ易く動く
ラヂオにて軍縮會議きしとど言葉通じてをうらめて過ぎぬ
十五日に小豆がゆをばたかぬとて主人夫婦はいさかひをれり

清野

小菊

野も山も晴れですがしく見ゆるかな朝あけの空に日
の太なる

朝ばらけ峰の白雪まだならなり陸奥の山里春立つらしも

赤城

春芳

夜更けてひとり居る夜の淋しさを風訪れて慰るかも
啄木の歌を讀みつゝ涙するうら若き日の何か淋しき

愛する者の獨斷と横暴

双葉清

愛するものをみんな自分のものにしたがる人間よ——
その単純な考えを捨てなさい
籠の中では、雀が二羽
なくとも忘れて狂ひ廻つてゐる
温かい寝床と、美味しい餌とを與へられた
それは喜びの飛脚である、と
思ひ違つてはいけない
彼等が何ものよりも求めあぐむもの
それは無限なる天地と、彼等の小さい
創造の家とである
それらのすべてを奪はれたら
何の喜びがあり得られよう

「誰も知らない」

これは誰も知らない。おそらく神様だつて知らない。
ないだらう。何となれば眠つて居た時だから……
まどろんだ夜中月がジョイとして動かない
森羅万象は幽静な眠りにおちて居る
だが眠らないものがある

駒木根忠慶

「これは誰も知らない。おそらく神様だつて知らない。」
「實際人間云ふ動物は利口そうで馬鹿だ」
「全く俺達の価値を知らない」
「それバツナの金の尊さを知つてこんなに澤山
居る俺達の価値を知らない」

春雨

赤城春芳

五月——
寂しく雨は降つてゐた
池の畔の
柳の枝は垂れて
其の端が
水面につきそうだ
細く
垂れ下つたその枝の個々個々に
黄色に
若芽がふくらんでゐる
芽生えるのだ——
春雨は
意味なく若芽に當る。
處女の様に
ふくらした若芽が雨にうけて
雫を垂れた
そうして——
一重二重三重……と
波紋を描いた
川鳥が
サツと樹影より

水面をかすめた

——北海道池畔の思ひ出——

人生レビュウ

鈴木月歩

「俺が顔をゆがめたら汽車は何處を走るんだ」
「あんな柔弱不羈なそして少ない金が何になる」
「俺達はこの大勢兄弟があるとして離す事
の出来ない重要な立場に居る……」
「それも知りやがないんだ」
「あいつ等はダイヤモンドが大切だと思つて居
るんだ」
「金が無くしては一日も生活出来ないと思つて居
るんだ」
「虚栄心の享樂を満足せしめるあんなやくざが
我が生活と何んの関係がある」
「あいつらはあかのたけた生活がトテモ好きな
んだ」
「俺達兄弟を見ろ」
「貴様等の爲に血分どうの生活をして居る俺達
の相貌を見ろ」
「俺達の兄弟は多いんだ」
「忍耐力がウシとあるんだ」
「車に乗つて心地よいのは何の爲だ」
「ホルゲンがセメントばかりと思ふか」
「田畑は自分一人で耕したと思つて居る」
「モートルの發動機が一人で動くのだと思つ
て居るが」
「そつちこつちに散在して苦しんで居る兄弟の
努力を知りやがないんだ」
「俺達全部で一塊になつたらどうするんだ」
「オウ兄弟が鳴き出したぞ」
「ではまた明夜にしよう」
「俺達は老衰する事がないんだ」
「益々力強くなつて行くんだ」
「オウ人間ども俺達の熱と力とを信する事を忘
れてはいけないぞ」
「あんなやくざがれの風来坊に魅惑されんな」
「お月様はさまりわるそうに光線を強めて動き出
した」
「鐵は早く持場についてゐた」
「誰も知らない。おそらく星だつてそうだろう……」

彼女を知つたのは
去年の夏だつた……Y濱にて
眞實打開け語り合つたのは
月の照る静かな秋の夜だつた
變らぬ愛を誓つたのは
寒い木枯の吹く宵だつた
だけど、それは
テンポの速いレビュウに過ぎなかつた
サヨウナラ……
悲愴な言葉が二人の口からもれた
二人は別れたのは
それは十二月の末だつた
二人は、これが
永遠の別れであることを知つてゐた
同時に、人生レビュウは、人の力で
どうすることも出来ないことを知つた

秋の朝

初霜の下りた朝の地上に
太陽が透徹した光を放射し
若い牡丹の黄色い脚が
大根の切れ端をころがしてゐる
そして、その真赤な鶏冠の逆光線

二月街

ひさすじの——
季節・夕暮・寒色の効果のもの
ハタ／＼揺れ・蹴る
老舗の黄色い店旗
角形鏡の
心は蒼ざめ色を失ふ

「時」の墓標

時計に刻む十二字は
寂しい「時」の墓標。
黒い衣の尼さんが

なげき 清野小菊

月はやうやく上れり
あたりの静けさに堰の流がひびきて
萬物に一樣に光をなげる月
せめて我をば影にながせ給へ
つく吐息は熱風となり
涙は川をなす
とむべき人やあらん涙——
とめなば壘となりて自然のなげき
世々の後につたへなん
思ひでの風はさまれと
あの葉はさわめく
月の思ひのかなしさは
しぐれとなりてふりそぎ
我が胸のかなしさは
出る、涙の川なりき

あきらめ 城 ゆかり
淋しくなんかあるものか
ノートの隅に
印しては今日も獨り
涙ぐむ。

夜

あなたよ
想ふをこぼしやめ
無気味な海調のくづれが
夜の沈黙をゆすつていつた、
チラリ
暗の先端を本能がすめる、

心 蔵

いろいろなものを見せてはくれた、
だが、お前はお前の一番大事なもの
を見せてはくれない。

青い風景

水脈がひかる
青うくひかる
——枯葎のさらさらと鳴る向ふに。
水脈がひかる
さびしくひかる
——青うい船の通つてゆつた河岸に。

入江 幸子

いつも姉妹で穴を掘り、
静かに息を退いてゆく
「現在」の死骸を埋めてゐる。

田村 想人

近代的自殺詩
——瞬——
次・次に窓をのり越え
(ゆり續けるまゝに)
空・
青空に離叛する

鈴木 青路

せめて、はかない「現在」のため
紅いばらでも埋めませう。
午前二時、
女は何事も知らずに
深い眠りに落ちてゐる。

丘 八重子

胸の中で煮えくり返つてゐるであらう
赤い心臓かお前は秘めてゐる
青うく染つて、おぼろに霞んで
まだ消えきらない艦の音が
水脈を傳つて聞えてくる……
枯葎の土手に潜めば
現ない想ひよ、夢よ
身にわが身も、夢よ
香爐のやうに青煙つてくる。

青い空に

佐藤 慈人

青い空に
涙しない
遠い彼方の空に
風が走つて行く
ひやらかな
おもひを残して
青い空に
廣々とした
遠い彼方の未來に
心が走つて行く
しずかに
もく／＼として

黄昏る、ころ

武田 あけみ

ちかつ山とほつ山なみ打みつ、枯野を歩む夕ちかきころ
むら消えし大地の雪に月のかげさやかにさむし北國の街道
わかまへを走る夜汽車の窓あかしみやこの母の慕はしきかも

寄宿舎の生活

湯のたぎる部屋のこもれり教へ子はひねもす羽子にさぐりて居り
わが心力なき日はおもむろに歎異鈔など誦みけり

寺庭

加藤 輝雄

一もとの古木冬枯れてさむざむし妙慶寺の庭暮れなづみつ、
童子らは遊ばずなりて蜜柑の皮散りばふ庭の寒けかりけり
夕づける窓ひそまれり讀むとしもなく書物をひろげて坐りゐるなり
冴えかへる霜夜の空におぼつかなくすら明れる梅の花かも
家鳩の今宵くくだみ啼きゐるよ御堂の梁の巢はさむからし

寒に入る

町山 正利

湯はてりによく寝入りたる幼な兒の双手に塗りぬ凍傷藥
妻も兒も母も早寝に術もなく一人しのめる茶のうまからぬ
新年の挨拶交す誰れ彼れの自らしにさぐりめさあへる
正月も三日をすこしとなしと想ふ年齢さですにすぎつる

冬

細野 三郎

ほがらかに子らの笑まひる見つめつ、おのづからに湧く笑みひあり
生れつき頭わるき子あはれとは思ひ、がらも叱りてしまへり
おのおのもわれの叱らぬ子はあらじ悔ゆる心のなしといはずも
貧しくも我家と思ふゆとりよき足長々このべてねにけり

氷雨

石川 梅子

吾がつまの歸り遅しと氷雨ふる深夜をいねす待つはさむけし
田守りわざ馴れてさびしも山小田にひとり田を鋤く吾はをみなにて
山小田にひとり田を鋤く冬の日の雪そよい空さえつゝさむし
霜よけのわらをしぞけて掘るねぎのほそ根まゝろく香はみちにけり

早梅

佐々木 顯

雨の日にみ山のぼりて寺まわり木魚の音をしめやかに聞く
雨の日に郊外行く梅林うららかにして一軒家よし
子をつれて村のまつうにい行くなり日はうららかに梅の花咲く
あかときを雨降り出でてひとしきり寺の大鼓のはかに聞こゆ
子の臥して發熱あれば父母の氷枕に心おちゐず
ほど遠き村のまつうに歩み行く子のつかれければ父に負はるゝ

詩南社 第二回 短歌會詠草

ふさはしき生葉ぞとしそしむか女人力士
ら足らひがほる 高久 晩
幼兒を背にして歌ふ子守りうた氣安さに霞
て懸入りたるらし 佐々木 顯
風さむき窓のみに冬に歸り住み紙帳を吊る
と人に告げなむ 島田 忠夫
轎重車のにらまれ仕方なしに兵士等の顔
見送りて立てり 宮田 青波
燈火にたぶさのゆらぐ大男まめなばらまく
その威勢よき(節分) 只野 清
山里の冬一日さしななつかしき落葉の朽ち
しみをあゆめり 明石 濱男
薄雪はつかに見えてこの朝の目におざろ
なくはれ梅まけぬ(朝明) 松村 清
満ち汐の波はあらたき湯なかのいほつ岩む
ら揺れみだれ見ゆ 佐藤 正實
海鳴りのちかき夕ぐれ庭へは枯れし紫苑
にみぞれ降るなり 武田 曉美
たふりしそいさ時をひとり吾れさしう
つむきて黙し居にける 矢野 梅孫
竿竹の割け目が笛をならす日た寒むい嵐が
一日吹いて 片寄 歌二

とろろと雪消えのこる竹むらに來なく小
鳥の聲のさぶさき 明石 濱男
まばらなる冬がけの林ゆき／＼てはろけき
空を見ればかなし 水町 冷子
しみ／＼と針もつ宵は忘れぬ女らしきに
歸るわれかな 武田 曉美
獅子舞が怖しかった幼なかつた自分であつ
たはしやがきこえる 池上 登美路
よきとありあしきなすてて迷はじな日暮惡
のなき世にしあなれば 只野 清
日ぐせな風と思ふけはひあり空の極み
の冴えてひそけき(未明) 松村 清
高らかに唄ふをみな見つゝうれしこは
中山百合にほふところ 宮田 青波
座船に子等まつはるもさびしけれ砂原廣き
磯の夕ぐれ 高久 晩霞
いはき野は氷雨降りたり越後路の高田の兵
舎に雪や積らん 佐々木 顯
あやふかる命さうけて今日もまた待てどか
ひなき人の戀しき 水町 冷子
夕なごの磯を歩めば大空の雲は我が手に觸
るゝかに見ゆ 佐藤 正實
うつし身の命かなしとあらなくに音を戀ふ
なとめ世にあらざりき 島田 忠夫

詩南車詠草

早春 明石濱男

みどりあさき若芝の上に音もなく雨ふれりけり春のあかとき
あかとき小雨かむりてつやめける楓若葉のあはきくれない
フレイムの中の日ざしに仙人掌のくれないの花いきづく如し
春のあした遠山並の裾原はむらさきあはく霞こめたり
芦の芽のはすかに青き水のべに霽ゆる見ゆ春のあかとき

なりはひ 島末眞之

うらへけき旭庭に照り満ちてほのかに靉の乾く匂ひす
さ夜更けて米搗きおれば佗びしくもトタンの屋根に靉の音す
牛の餌を煮る火明りのおとろへて縄なふ手元暗くなりたり
縄をなふ手元の冷のしるけさよ永雨は雪とかはりたるらし
さはやかに晴れたるおちの島山を見つこの朝旗立てにけり
うらへけき朝日さしそわ畦道を式すみて子の歸えり来る見ゆ

苦しみの長かりし業を遂げ終へし娘のかへる日を指折り待つも
才能を誇らぬをこそまことなる女といはぬ心せよ吾子

佐藤淡雪
南ま子

わすれ得ぬ人の名をよび野路行けば狂は
し春の夕暮 矢戸梅孫

大聲でよんでたと思つてはじつとち
たる目に浮へる想ひ 池上登美路
雨はれて厨裏の窓煙がぬれたまんまで月
夜となつた 片寄歌二
山煙のだん／＼細歩むとき小學生徒もだし
ゆくなり 佐々木顯

ふたとせの冬めぐり來ぬ桃いろの夢はぐ
みと家を離れて 武田曉美
日を経つたおのづからなるうとみ心ないま
しすてたり友の歌來ぬ 松村清
中原の鹿を射とめていさましくかちどきあ
げむ益荒男はたれ 只野清

思出はふし銀のごと重くして我心にせ
まりて來ぬ 水町冷子
ひさすじにみ祖したひて漸きましとわが父
上の尊とかりけり 明石濱男
千とて經し樹々空を掩ふ八幡の境内に來て
心度まし 高久晚霞

雲間もる月の光に照らされし阿伽井の峯の
白雲の色 佐藤正美
二月五日 於「木兎莊」

生と死の岐路にある如うつらうつら訪れのなき君を戀ひつゝ
待てど來ぬ君の便りを待ちわびつ今宵も熱の高まるおぼゆ
ものいへば苦しきと知つゝ我が心いま語りて居んき

佐藤義家

草屋根に苔生ひしげり一夜さの雨をふくみてう光るも
夕ぐれのはの明りせる庭隅の大なる籠に黍あふれあり
切立の巖はに根おく老松の奇しき姿に高く聳ゆる
打ちよする波くだけ散りて磯巖は黒々白えてまたかくれけり
見上ぐればいとどなつかし二つ箇のひひがれ姿見え近つきぬ
波ひびく海の彼方に一片の白雲浮みひろごりにつゝ

汽車中詠

ふたりの我・その他 宮田青波

たまさかに獨ある夜のつゝましき尊きちから充ちくるおぼゆ
おのづから祈らまほしき心湧くこの度尊しとおもふ
アバ父よと神仰ぐわが或る時はサタンと腕を組まんとする
偽りをこゝだもちゐて時折はさかしらがほに法宣ふ我
靈祖を祭らう心あなそはし母と妹とが萩の餅搗く
ちゝのみの父の筆あとなつかしみ幾度もまねて書きて見しかな
布さらす人等が竿を見てをれば紺のにはひのただよひ来るも

寄贈誌深謝 (到着順)

赤道、東邦詩人、せふり、労働藝術家、宣
言、うるみつ、詩短冊、歩み、北海詩歌
砂丘、途上、暮鐘、草原、白樺、土筆、蟲
空と樹木、ソウソウ、詩人劇場、地上樂園、リ
んごの花、磁場、北陸文藝、青杉、みなと
とし、新文學、1330、SEIDENR
OOM、詩街人、白路、詩祭、あんだんて派
火花、土人、風と雄草、聖樹詩人、曉聲、
ラ・ルート、短唱園、グ・ヘボ、女人文藝
パリエード、PLEADS、前衛文學、ニコ
ファイの鐘、麗人、詩使徒、近代藝術、愚提
詩人、桐の花、反逆の炎、岐阜民謡、愛蘭
佳人、緑の丘、いばら詩園、紅ばら、わだ
つみ、初穂、灰、草人、流星、一九三〇平
放射線、若人、東京文藝新聞、文藝詩潮、
つたみ、土筆、TEUBO、千秋、北陸文學、
創造文學、斜影、双葉、しづく、郊外、白
露、エン樹、貨物列車、未耕地帯、詩原始、
涙、藻、新進文學、郷土詩人、濤、風、
あをぞら、青りんご同人パンフレット、杉
澤齊追悼號、

戯曲
悲曲 (一幕物)

丹野八千代

時 現代。或る初秋の夜半。
處 一小都會の場末。
人 男。女(その妻) 其の子(二才)
警官五六人。

舞臺。中央にしきりあるみすばらしき家の中。右手の間に茶ダンス。其他少數の家財道具あり上手に戸口あり左手の間には古ぼけたダンスあるのみ此の室に油氣のない髪を無難作に束ね、どこかつかり世帯に慣れきれぬらしい様子の女が泣き叫ぶ手を寝かしつけようとしてゐる、が子は益々強く泣く。女、立上り室の中を靜に揺り歩く。

女(涙ぐみつつ)『お、よし、泣くんちあいな。……どうしたつて言ふんだらう。そんなに母ちやんを泣かせるんぢやないのよ。お母ちやんだつて悲しいんだからね。いゝ子。いゝ子。お前が大きくなつたら二人でお父ちやんさがしに行きませうね……。』

女『はい。何もないんですけど。』

戸棚から有合せ物を出し、女いそ／＼と膳立をする。男旨そうに食べ初める。女、男と向ひ合に坐り給仕する。暫く沈黙。

女『ね、あの女どうしました。今まで何處にゐらしたの?』

男(苦々しく)『あれか!もうとうに別れてしまつた。それから俺は方々渡り歩いてたんだが。……』

女『そんなら何故直ぐ私の處へ歸つて下さらなかつたの?』

男『どうしても歸れなかつたんだ。金は皆使ひ果した。あんな女と墮落までしてどうしておめ／＼歸つて來られる? お前に合はせる顔がない。ほんとうに濟まなかつた。俺は一生會ふまいと思つてたんだが。——とう／＼來てしまつた。御飯食へ上げる女(膳を隅に押しやりつつ)『すまないなんて……直ぐ歸つて下さつたらどんなに私嬉しかつたか知れないわ。もう決して私の傍離れないで頂戴。私一生懸命盡しますわ。あなたをちつとも恨んでなんか居やしないのよ。』男の方へ寄る。

涙を拭き靜かに子守唄を唄ふ。間もなく抱かれたまゝ子は寝入る。と、かすかに戸をたたく音する

20

女 ぎよつとする。

表の聲(あたりを憚り哀願するやうに)『すまないが開けて呉れ。中へ入れて呉れ。』

女(薄暗へ子を寝かせ戸口に立つ)『どなた?何御用ですか?』

表の聲『すまないが開けて呉れ。中へ入れて下さいそれから話します。』

錠を外し女怖る／＼戸を開ける。戸口に一人の男立つてゐる。内からの薄暗い電燈の明で、女ちつと男の顔を瞪める。

女(突然)『あ、あなた! (男に抱きつき泣き出す) 私待つてましたわ。待つてましたわ。何故私を置いてつたの。どこへ行つてゐたの?』

男『まあ中へ入れて呉れ。近所に聞えるといけない女、男を中へ入れ戸を閉める。男は黙つて茶の間に坐る。蒼白い神經質な顔。みすばらしい労働者の風男(言ひにくそうに)『腹がへつてゐるんだが、飯を呉れないか。』

男『有難う。そう言はれると返つて苦しい。』

女『ねえ、あなた、もう決して外へ行つちやいや私どんなに今まで淋しい思ひをしたか。一度はともあなたが恨めしかつたわ。私を置いて何處かへ行つちやつたんですもの。——でも今、丈夫で歸つて來て下さつて、私嬉しいわ。嬉しいわ。』

男の膝にうつ伏して泣き入る。男。ちつと女の髪の毛を落す。暫らく沈黙。

男『もう泣かないで。——お前にはかり苦勞をかけてすまなかつたねえ。……(軽く女の髪を撫でつつ)此の意氣地なしの男をうんと恨んでくれ。打つてくれ。俺はお前のして呉れることなら、なんでも喜んで受けるよ。』

女『そ、そんなことおつしやつて……。』一そう泣く。男暫く女の肩をさすつてゐた。が急に苦しい表情になる。

男『さ、泣くのはよして呉れ。顔を上げて呉れ。俺はかうして居られないんだ。行かなければならぬい。』

女(驚いて顔を上げる)『とうして。え?どうして

どうして行つてしまふの。あんなに願ひしたのに、何處へ行くおつもり？私が厭なの。——やつぱりあの女が戀しいんでせう。ね、憎らしい。私騙されたんだ——」疊へ泣き伏す。

男（苦しげに）『もうあのことは言はないで呉れ。

——誰があんな奴が戀しいものか——俺は今、一番お前を愛してゐるんだ。だからこれ以上迷惑をかけたくなと思ふんだ……今に何もかもわかつて呉れるだらう。兎に角こゝに長居は出来ない身なのだ』立ち上る。女後からしがみついて叫ぶ女『待つて下さい。外へ出ちやいや！私を置いて行かうつたつて離しません。——どうしても行くんなら私を殺して……』

男『そんなわけのわからん事を言つちあ困るぢやないか。ね、おどなく離して呉れ。——今にみんなわかつて呉れるよ。』

女（急に男をつき離し、ヒステリックに）『そうでせうねえ。あの女が待つてゐるんでせう私ちやんと知つてゐるわよ。おあさよなら。もう私の處へは来ないで頂戴。返つて迷惑ですから。私もうあなた

のことなど忘れちまひませう。あゝつまらなかつた。今まであなたをばつち慕つてゐたのに……折角来て下さつたと思つたら、もう私を捨てて行つてしまふの。随分薄情ねえ。いゝのよ。私も薄情者になるから。早く出ていらつしやいな。さよなら。早くあの女の處へいらつしやいな。もう決して會はないことにしませう……ほほ私もよつほど莫迦よ。今まで騙されけたのねえ。』

男はちつと悲しげに女を睨めてゐたが。そこにべつたり坐つてしまふ。

男『俺はお前にうんと恥しめられ、苦しめられねばならない人間なのだ。うんと恨んで呉れ。叱つてくれ。罵つてくれ。——あゝ、だがそればかりでこの俺の罪は消えやしない。俺はどうすればいいのだ。……』

頭を抱へ込む。女、急にすまなくなり、男の顔をのぞきつゝ機嫌をとる。

女『いやよ。そんなことを言つちあ。私ちつとも恨んでなんか居やしないわ。唯ね。私を置いて行つてしまふとするから憎らしかつたのよ。私が悪

かつたわ。——一体何處へいらつしやるの。いやよ、あなた一人で行つちあ。私も連れてつて頂戴

ね、私あなたとどんな處へも行くわ。——あゝ、そう、そう、すっかり忘れてた。あの子を見て下さいな。とても大きくなつたわよ。あの頃まだやつと笑ふ位だつたわねえ。此の頃はもう大い

の事眞似てそりあ可愛いのよ。』

男（眼をかがやかし）『どこにあるの？』

女『次の室に。さ、行きませう。』立上る。

男『やつぱり見ない方がいゝだらう。——これ以上

お前には迷惑をかけたくないのだ。』

女『又、そんな——迷惑かけるのかけないのつて何なの。それともこんな私でお厭になつたの、ねえ今まで一人で一生懸命育てゝゐたのも、あなたを喜ばして上げたかつたからよ。』男仕方なく女に従ひ次の室に入る。

女『そら、こんなに大きくなつたの。可愛いでせう抱いて下さいな。』

男（子の顔をちつと睨めてゐる）『あゝ、でも折角よく寝てゐるから止そう。唯かうして見てゐられ

るだけでも嬉しい。』

女『そう——』

この時、戸口に多くの足音がし、戸をどん／＼たたく、男ぎよつとさする。

女『今頃何でせう。』戸口へ行く。『どなた？』

表の聲『警察から来たのです。お尋ねしたいことがあるから開けて下さい。』

女急いで戸を開ける。警官五六人立つてゐる

警官甲『實は少し前に此の近所に泥棒が入つたと言ふ報を受け早速馳けつけたのです。』

末だ此の近所にゐる筈ですがお宅では御存知ないですかね。』

女『まあ——一寸周章てるが直ぐ強／＼いゝえ』

警官乙『たしかに此處へ来た筈ですが。』

女『私一寸も存じません。今まで子供と寝て居ましたんです。錠もちやんどかけて置きましたし……』

警官甲（警官乙に）『變だなあ。確かに彼處から逃げ出したんだから、此處へ来るより外ないんだがそれともまだ此處までは来てゐないのかも知れない。もう少し近所を調べてからにしようか。』

警官乙「ぢあ、そうしょつ。」

警官甲「失禮しました。他を調べて來ます。それまでにもしやその泥棒が来るかも知れんから用心して下さい。若いやせた勞働者風の男です。」

警官乙「どうも變だ。確かに此處に違ひない(獨言)。警官達去る。女、呆然と見送つて居たが急に立上ると戸を閉め次の室に駆け込む。

女「あなたでしよね。今の聞いたでせう。どうしたの。どうしてそんな事なされたのえ」つめ寄る。男うつむいてゐる。

女「ねえ、何故そんな事なされたの。」

男「すまない、ゆるしてくれ。」

女「何處へ入つたの。」

男「あの角の荒物屋へ。——だが騒がれて逃げ出したのだ。」

女「まあ、あの家知つてる家ぢやないの。どうして入つたりなどしたの。」

男「少し許り金が欲しかつたので。」

女「ねえ、何故私の處へ來て下さらなかつたの。」男「そう責めないで呉れ! (間) 實は俺は、二度と

此の町へは來まいと思つたのだが。——どうして

もお前の安否が知りたくて、旅費だけどうにか作つてこゝまで來たのだ、お前の姿を見た時はほとんどお前に今までの罪をわびやうと思つたが斷念した。——

お前の安否が判るともう此の町に居る必要もないので、又何處へか行かうと思つたがその時は金がちつともなかつた。で、こんな悪い考へを起してしまつたのだ。ほんとうにすまない。迷惑はかけたくないと思つたのだが、もう捕へられると思ふと急ににお前に會ひたくなつて、とう／＼此處へ逃げてきてしまつたのだ。」

女「そう——私のためにねえ。」(間)

暫く沈黙。と再び足音がし、戸を叩く音する

女(周章々)「あーあなたどうしませう、早く押入れへ、早く——」

男「もう逃げかくればすまい。」

女「そんなこと早く隠れなさい。早く。」

戸を叩く音荒くなる。

女「早く隠れなさいつたら——」戸口へ立ち錠を外そ

うとする。と、男も出てくる。

女「あなた——」睨めつめる。

男「いゝから戸を開けてくれ。」

女「開ける。先の警官達どや／＼入つてくる。」

警官乙「確かに此の家です。……あッ——」

女、あはて男をかばふ。

男「どうぞ、繩をかけて下さい。」

警官達上り込み男に繩をかけようとする。

女(警官達の前にふさがり)「待つて下さい——一寸でいゝんですから、待つて下さい。お願いです……。」警官荒々しく女をつきのける。女、必死となつて警官達にしがみついてくる。

女「待つて下さい、違ひます、違ひます、これは私の大切な人なのです。繩をかけちやいやです……」

警官乙「泥棒をかくまつたりして、あなたも同罪になりますぞ……(冷やかに笑ふ)」

女(繩をかけられてゐる男に)「あなた何故そんなにおとなしくしてゐるの、何故にげ出さないの。意氣地なし——弱虫——」

男「……」。悲しげに眼を閉ぢる。

警官甲「さあ、行くのだ。」男をせき立て、皆戸口へ立つ。

女「いやです——いやです——(男の足にしがみつき) 離しやしない……連れてつちやいやです——」

警官乙「いけない。お離しなさい……」女の手を振りもぎる。警官達急いで男を引いて立ち去る。

女わつと泣き伏す。がつと立上ると次の室に駆け込む今の騒ぎに子は眼をさまし泣き叫んでゐた。

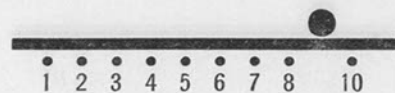
女「妙子、妙子、行くんですよ。さ、早く。」

子を抱いて女、眞暗い外に飛び出す。

女「妙子——はらごらん、お前のお父ちゃんが行きま

すよ。お前早く見るんですよ。お父ちゃん、はら、ね、わかつたでしよ。見えたでせう。お前のお父ちゃん泥棒なのよ。そしてもう二度とお前と會はれないんですよ。よく見てお置き。ね、妙子、お父ちゃんはお前を置いて行つちやつたのよ。悲しいわねえ。あれ、お父ちゃんが見えなくなつちやつた。さ、妙子、私達も行きます。ね、ね、……。」口早やに言ふと女、泣き叫ぶ

子を必死と抱いて駆け出し、上手より退場——幕——



K • K A M A Y A

目 科 療 診

内 科、小 兒 科、婦 人 科
外 科、耳 鼻 咽 喉 科
皮 膚 病、花 柳 病 科
レ ン ト ゲ ン 科

院 長 醫 學 士 高 久 忠
副 院 長 新 潟 醫 學 士 赤 羽 清
藥 局 長 藥 劑 師 佐 竹 菊 雄
宅 診 午 前 往 診 午 後

平 町 田 町 六 十 四 番 地

高 久 病 院

電 話 五 一 三 番

【 頒 價 貳 拾 錢 】